

知しているかを調べることを最終目的とし、そのための予備実験を行った。被験体は、ニホンザル、オス・メス各2頭、計4頭。装置は、タッチ・パネルを装着したモニターを据え付けたチェンバー。刺激はニホンザルの顔の静止画像、オス・メス各5枚、計10枚、オス・メス各1枚で対提示された。被験体の課題は、モニター上に提示された2枚の静止画を選択する（触る）ことであった。第1実験で、被験体に任意な順序で刺激を選択させたところ、被験体の選択順序に場所による選好性が認められたが、刺激ごとの選好性などは認められなかった。各刺激選択までの反応潜時をみると、第1選択までの潜時の方が第2選択までの潜時よりも長く、被験体はまず最初にどの順に選択すればよいかを決定していることが推察された。第2実験では、被験体は5組の刺激対について、オス→メスの順に刺激を選択することを強化された。実験進行に伴い、クライテリオン（連続2セッションで90%以上の正答率）達成に要するセッション数が少なくなるという節約効果が認められた。第3実験では、被験体の選択方略が「AとBが提示された場合にはAを選択する」といった対固有なものであるかを検討するために、実験2のようにオス刺激とメス刺激の間に一対一関係を設けず25通り全ての組合せについてオス→メスの順に選択することを強化した。ストレート対（実験2で提示された対）、クロス対（実験3で新たに提示された対）ともに90%以上の正答率を示し、被験体の選択方略は対固有なものではないことが示唆された。第4実験では、被験体の選択方略についてさらに詳しく調べるためにプローブ（新奇刺激）を提示した。プローブ・オスーオリジナル・メス対では、オリジナル・メスを後に選択する率が高かったが、オリジナル・オスープローブ・メス対では、オリジナル・オスを先に選択する率は、23.3~48.3%であった。この結果より、被験体の選択方略は、どれを後に選択すべきかを規準にする「後決め方略」と新奇な刺激を先に選択する「新奇方略」との混合である可能性が示唆された。

計画：5-3

弁別逆転LS訓練における2種の情報試行の作用の比較

小牧純爾（金沢大学・文学部）

告示逆転訓練パラダイムにおける2種の情報試行の間接的転移作用（indirect transfer）に関する予測を吟味するため、5頭のオスのニホンザルにWGTAを使用して30課題にわたる弁別逆転LS訓練を与えた。

15日間の予備訓練の後、被験体を3群に分け、PSI群とNSI群には逆転LS訓練各課題の習得段階と逆転段階の間に3試行の情報試行を与えた。PSI群個体には、習得段階の負刺激を1個だけ提示し、それへの反応を強化し、次の逆転段階の正刺激に関する情報を告示した。NSI群には、習得段階の正刺激を単独で提示し、反応しても強化を与えず、後続の逆転段階の新たな負刺激について告示した。統制群個体には何れの情報試行も与えなかった。

統制群の1頭は学習能力が低く、予定の期間内に30課題を終了できなかった。その他の個体の成績を、先の実験でのデータと照合して検討した。PSI及びNSI群は各課題の逆転段階の成績がよいという方向が示された。情報試行は逆転を誘導する作用があることが判明した。一方、各課題の習得段階の成績の大まかな比較から、NSI群の習得の成績が統制群に比べ良好であることを示す示唆的な結果が得られた。

この結果はNSI試行が間接的転移作用に正の作用を持つことを意味しており、実験仮説を支持する証拠であると理解される。

計画：6-1

ニホンザルの距離知覚における視空間の異方性に関する実験的研究

藤 健一（立命館大学・文学部）

霊長類の視空間の異方性が、距離知覚の場面において見いだされるかについて、実験的に検討するべく、種々の行動学習訓練を施した。被験体：アカゲザル2頭（HaruとKoske）。方法：被験体の前方視方向に遠近の異なる距離に提示した2つの刺激（垂直に提示される小さな棒）の弁別を最終的に行わせるために、これに先立つ弁別訓練で